研究ノート

不管地補記

－天津，長春，大連－

森　　勝　彦

本稿は以前著した『不管地の地政学』（森，2019）の補足を行うものである。天津三不管，長春三不管の補足を行う他に新たに大連三不管を取り上げる。

1　天津三不管

天津三不管については三不管の開発に関与した東京建物の動きを補足したい。1898年に確定した日本の「予備租界」は中国側からの度重なる交渉により1903年中国側に返還された。ただし旧「予備租界」地区には付帯条件がつき，日本側が将来日本租界の拡張を行う場合，中国側と交渉する優先権を他国に対して持つこと，第三国の開発については日本側の許可が必要なことなどとして，日本側は実質的な予備租界扱いとして位置付けた。

1903年，天津日本領事館直属の専管租界事務所から日本租界の払い下げを受けた東京建物株式会社は租界の開発を行った。専管租界だけでなく華界に属する三不管の開発にも関与した。1908年までに三不管の内の１万2556坪の土地の永租権を購入し，１カ年銀34円33銭を地租として天津市直隷交渉公署に納入を始めた。

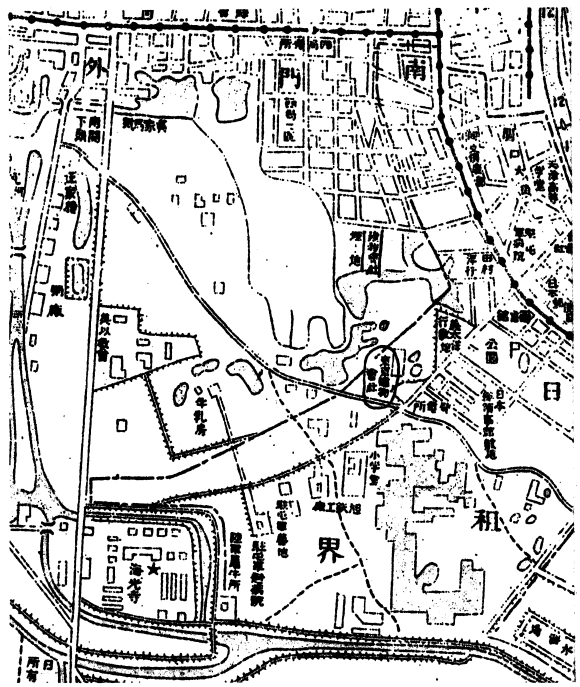

図1　『天津誌』天津駐屯軍（1909）所収図に建物名を記した図
（『支那省別全誌　直隷省』東亜同文会（1920）所収図）

キーワード：三不管，東京建物，作家，香炉礁

1909年発行の『天津誌』所収図に主要施設名を記した図（図１）によると，三不管の南東部に隣接する日本租界に東京建物会社（図中の囲み）がある。東京建物の天津支店は1903年，ここに開設された。東京建物が隣接する三不管の南に「建物会社埋地」とある（図中の傍線）。専管租界を含む付近一帯には海河の後背湿地の沼沢地がまだ広く残存し，排水，埋立が急務であった。1906年，天津支店は租界中心部の宮島街に移転した（図２）。

図2　東京建物天津支店旧址（2002年天津市歴史風貌建築指定。2002年筆者撮影）

三不管の開発を始める理由として東京建物は

「現在ハ之ガ不清潔ナル陋屋又ハ賤業ノ巣窟トナリ日界及華界ノ発展ヲ阻害シ屢悪疫ノ発源地トナリ犯罪ノ策謀地トナリ不良ノ魔窟トナツテヰル」（東京建物天津支店，1939a，９）ために，再開発を行う必要があるとした。そのような場所になったのは当初予備租界とした日本側にも責任があるのだが，三不管の本格的な開発は1912年以降の北洋政府時期（～27）に開始された。下野した旧臣層，軍閥による投資開発とともに東京建物も開発を行った。

1920年に日本租界の埋立，排水管の整備，街路の整備が完了し以降，市街化が本格化した。東京建物は三不管の東部で日本租界に隣接する地域を永租し開発，街路の整備を行い，最終的には三不管を南北に貫く街路を軸に不動産業を行った。三不管の都市整備に寄与したとして天津市政府からはその街路は建物大街と名付けられた。その街路名は2000年以降本格的な再開発が行われる直前まで南市には残されていた（図３）。

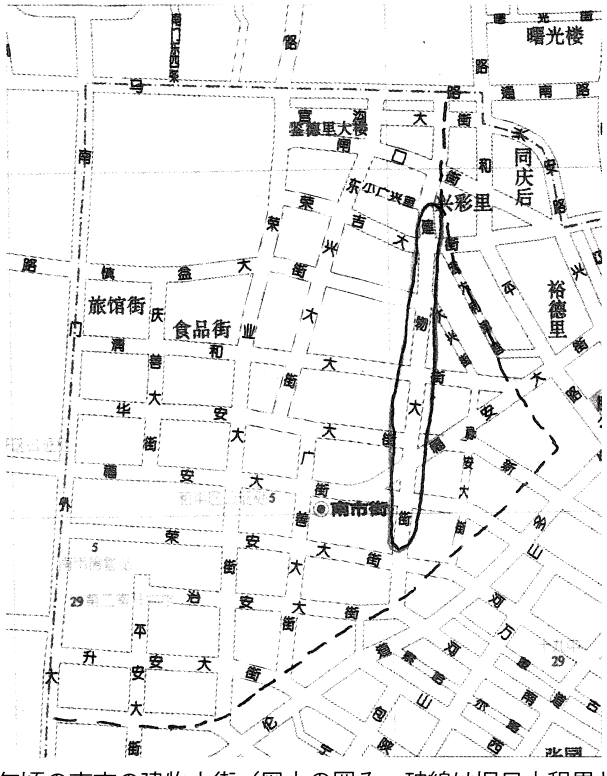

図3　2000年頃の南市の建物大街（図中の囲み　破線は旧日本租界と三不管の境界）
（『天津市地図册』天津市測绘院编 山东省地图出版社　所収図に加筆）

このような中，「昭和三年四月支那ニ於テ國権恢復論抬頭シタル際直隷官産整理所ヨリ該地ハ官有地ヲ日商ニ賣渡シタモノデアルトカ或ハ外國人ハ土地ノ所有出来ズトカ種々難題ヲ持込ンデ来タガ当店ハ大日本総領事館ヲ経テ一々之レヲ拒絶シテ居タ処其後内乱續キノ為該問題ハ打消サレ従ツテ地租モ徴収ニ來ラズ其侭トナツテゐル。」（東京建物天津支店，1939a，21）とあるように，1928年，東京建物は中国側より地租の受け取りを拒否されるという事態が発生した。これは租界の回収を大きな政治課題とした国民政府の姿勢を反映した中国側の付帯条件への抵抗，反発でもあった。東京建物には所有権がないという理由であったが，東京建物は永租権の存在を理由に中国側に異議申し立てを行うこととなった。ただ中国側も軍閥抗争の混乱の中で統一した対応ができない状況であった。

そうした中，1929年，天津市当局は三不管の主要五街区の道路整備，下水溝（暗渠）の修築費の三分の一を土地家屋所有者の負担とし，東京建物も永租権を持つ土地の負担総額の半分，残りは17人の借地人が負担をすることとなり，実質的に地租の存在を認められることとなった。天津市は1935年にも再度三不管の修築工事を計画し同様の負担を東京建物は行った。東京建物は三不管に永租しているすべての賃貸借契約が1943年に期限になることを勘案し，現在の家屋を取り壊して整地し分譲する計画を立てたが，借地人との交渉は難航し，ことごとく拒絶され計画の実現はならなかった（東京建物，1998，87-88）。

1920年代，軍閥内戦の混乱を避けるため華界の富裕層がフランス租界をはじめとする租界へ移る傾向が増大し，租界の拡大が計画されるようになったが，1916年のフランス租界の拡張への反対争議（老西開事件），1919年の五四運動以降，中国のナショナリズムの高まりに伴う租界回収運動の

全国化の中で，天津三不管でも日本の予備租界的扱いの付帯条件に対して中国側が様々な形で抵抗する傾向が強くなっていた。そのため東京建物も三不管での事業遂行に際して特段の注意が必要となっていた。

1939年天津の中心を流れる白河の堤防が決壊し，日本租界，三不管を洪水が襲い，浅いところでも腰まで水に浸かる水害が発生した。その復興に際して「小生三不管開発ヲ此水害ヲ機會ニ実行ス可ク特務機関小島大児氏ト協議」「三不管ノ件ニ付特務機関峯間氏ト懇談ス」「三不管ノ件ニ付特務機関長浅海大佐及折笠副領事ニ面會ス」（東京建物天津支店，1939b）とあるように，三不管の取り扱い，業務遂行について特務機関，日本領事館との協議が不可欠になっていたことがわかる。付帯条件の主張，実施が困難となった日本側，特に軍部は，三不管の主要業種であった賭場，阿片窟，妓院を支配した青帮を日本側に取り込み，三不管の「闇」の部分に対する影響力を保持した。三不管での特務機関の活動についても今後調査が必要である。

2　長春三不管

長春三不管については前著において1940年に発生したペストの発生場所，防疫体制についての論述が中心となり，三不管自体の実態について十分には触れられなかった。具体的な資料が殆ど存在しない中で，当時長春の旧ロシアの東支鉄道付属地であった寛城子に居住した日本人の作家の中に，三不管に関する描写をした例がみられる。三不管は寛城子と長春市街地の間にあり，寛城子に居住した日本人は長春市街地への買い物，通勤で利用した軍用路の途中にあるのが三不管で，日常生活圏の中にあった。

長春が新京となり，新たな都市計画が進行する中で新京駅北側の工場地帯に隣接する三不管も中心的な道路が整備され，満洲警察の派出所が置かれており，長春時期の全くの放任状態ではなかった。日本人が残している観察記録はこの時期のものである。整備された道路は，新京市街と寛城子および寛城子南側に集積しつつあった関東軍関係施設を結ぶ軍用路と新京駅北側と寛城子を結ぶ道路である。

満洲国の首都となった新京には日本人が増加しつつあり，不足する住居の確保地として旧東清鉄道付属地であった寛城子に住む日本人が増え，彼らは通勤，通学，買物などの生活道路としてこれら道路を利用した。軍用路には新京市街と寛城子を結ぶバスが運行されており，三不管というバス停まであった。したがって三不管でバスを降りて簡単な探索をすることも珍しくはなかった。途中の三不管の風景は寛城子に住む日本人にとっては生活圏の中の風景であった。その三不管に関心を持つか否か，どのような関心，感情を持つかは，個々人により様々であった。三不管を「細民街」「スラム」「魔窟」ととらえるだけでなく，そこに何を読み取っていたのかについて検討する必要がある。

当時の日本人の回想録から二人の文学者のものを追加したい。一人目の山田清三郎はプロレタリア文学者であったが，太平洋戦争中は転向し旧満州にわたり，大東亜文学者大会にも参加した。戦後はプロレタリア文学史の回想を行った。1955年出版の『明けない夜はない』（理論社）には，山田が満洲新聞社に勤めていた時期にたびたび訪れた三不管の描写が頻出する。『明けない夜はない』は小説であるが，舞台である三不管の描写はほぼ実態であるとみられる。また三不管および周辺の描写は自らが観察したものとみなせる。以下，三不管の主だった描写の部分を引用する（原文のま

ま)。

「この権力の真空地帯に，いつとはなしに細民窟が，はったつしていった。世の落後者，おたずねもの，何かの事情から世をせばめなければならないもの，そうした人たちによって，細民窟ができ，それはしだいに戸数と人口を，ふやしていった。そして，この物語がはじまるころには，約七百戸，五千人にちかい密集細民街を，きずきあげていた。

一九三二年，日本は，関東軍の武力をはいけいに，傀儡政権による〈満洲国〉を，中国東北の地につくりあげた。そして，長春の地に，首都をもうけて，新京と名づけた。翌年，日満両国は，紛争をさけるソヴェトから，中東鉄道の全線を買収することに，成功した。そしてこれによって三不管の地名の意味も，失われることになった。しかし，この地名は，そのまま用いられ，三不管のよび名は，そこにはったつした細民街の，代名詞となった。」

「現場にゆくと，胴体をぶっきったようなバス通りをはさんで，みるからにみすぼらしい泥づくりの家がごみごみとたてこみ，そのたてこんだ家のあいだを，まるであとからかきわけでもしたかのように，まがりくねった小路がいりみだれ，その中には，めぬき通りというべきものも，できていた。そしてそこには，細民あいてのあらゆる店々—安直ないっぱい屋とか，飲館子とか，質屋とか，食料品店，古着屋，布鞋屋，雑貨屋とか，茶荘，木賃宿，阿片館などが，軒をつらねてにぎわい，また三不管の戸数の三分の二をしめるバス通りより東のほうには，奥まったところに空地があって，そこにも，いろいろな露店がならび，大道芸人や大道易者なども，客をよんでいた。そんなわけで，三不管は，細民窟ながらも，一つの小都市をつくっていたのである。」

細民街，細民窟ながらも様々な業種が集まり都市的集落を形成し，空き地にも様々な露店や大道芸人，易者などが集まっている風景は，当時の中国各地の三不管の風景と相通じるものがあった。『明けない夜はない』には，三不管の住人として抗日運動家，脱走日本兵などが登場し，満洲国への抵抗の拠点として描かれる。そして1940年９月の新京で発生したペストに主眼が注がれる。山田はペストの発生を関東軍の人為的謀略とする立場であり，三不管がその発生源であるとする。

二人目の北村謙次郎（1904～82）は1912年に家族とともに大連に渡り10年間，暮らした。その後は東京へ戻り作家活動を開始した。1937年に新京に渡り，雑誌『満洲浪漫』を創刊するなど満洲国でただ一人の職業作家となった（韓玲玲，2015)。短編連作小説『或る環境』シリーズの中の「つひの栖」(『文藝』第八巻第八号，1940）に三不管の描写が登場する。

「馬車はガード下をくぐって，三不管にさしかかろうとしてゐた。狭い四辻に満人の交通巡査が立ち，右往左往する大車（荷車）や馬車を整理してゐる。左手に緑を繁らせた白楊四五本を前にした派出所，右手には赤いポストを置いた雑貨店「福興泰」があって，いはばそれが三不管の入口といふことになるのである。往來が混雑するので，馬車はぐっと速度をおとし，忠一は左右に流れる商店の看板を，とびとびながら注意して讀んで行つた。藝華鍾表眼鏡店といふのがある。時計店である。赤い房のついた飾りを二つ下げた「和盛發」は料理店，刻字局とあるのは印章店だし「當」の文字の見えるのは質屋である。「吉源永」…鍼力細工，修理車燈。「寶昌隆」…襍貨倶全。「同聚福」…五色玻璃鏡子，油漆糊棚刷漿。およそ小難かしい表現ながら，屋號を示す文字の兩側にはたいていさういつた商賣の内容を示す文字が記されてゐて，それを見て行くと，小部落ながら生活に必要な商賣は何でも營まれてゐるといふ印象を受けるのだ。醫者も住んでゐる。文具店もある。「聚興長」といふのがそれで，兩側に油酒米麪，化粧文倶と記されてゐる。兩洋薬材，丸散膏丹と書いて

掲げたのは「鴻徳堂」といふ薬屋，猪肉舗と書いてあるのは豚肉を賣る「廣盛興肉舗」それに「會新池」といふ湯屋までちやんと出來てゐる。けばけばしい原色で彩つた店頭の装飾，理髪店の奥から響いてく來るラヂオの支那芝居の聲，銅鑼を叩いて客を呼ぶ屋臺の食物店，その間を縫ふ馬車の駁者たちの懸聲，濛々とたちあがる塵埃，鼻を打つ油の匂ひ，その中に佇んでぼんやり往來を眺めてゐる満人たち，買つて來た魚をむき出しのまゝ手にさげて，のそく歩いて行く白衣の鮮人，往來を横切る眞黒な豚，家鴨…といつた雑然とした風景が五六町ほどつゞくと，右手斜めに奥に向つて開けた狭い道路があり，その兩側に野菜市が立つてゐる。簡単な木構へのバラックに，高粱がらの屋根を覆ふたようなお粗末な店が十数軒も並び，店先には葱，韮，白菜，小松菜，その他日本人には目新しい菜つばなどを積んで，この界隈に珍しい新鮮な色彩と香りとを漂はしてゐる。」

とある。この時期の三不管は満人警官がいる派出所が置かれ満洲国の管理下にある中で，多種多様な商業，サービス業が展開し，満人，朝鮮人を主体とした集落生活が営まれている描写が生き生きとなされている。子供のころの十年間の大連での生活体験が，大人になってからの新京・寛城子での生活環境の理解，関心を広げ深めている。そこから北村謙次郎は，満洲の下層階級に対する親しみ，同情と，「五族協和」が絵に描いた餅になっている主たる原因としての日本人の満洲に対する無理解，差別，支配者意識への不満，怒りを持つようになった。

山田清三郎は，戦後，三不管を軍部の横暴の場所と抗満，抗日運動の拠点と位置づけ，北村謙次郎は民衆の貧しいながらもたくましく生きる姿を理解する場所としてとらえた。中国近代の三不管の成立，変容，消滅に対しては，日本が様々な形で関与していることが多い。三不管のとらえ方についての多様性について今後も検討したい。

3　大連三不管

中国近代の不管地は，中国（華界）と帝国主義列強（租界）との狭間に形成されたものが多い。これに対して大連三不管は日本の植民地行政機関の狭間に形成されたとみなされる特異な例である。

ロシア租借期の19世紀末，商港，城街，鉄道建設に大量の労働者が必要となり，洼口公議会（大連市商会の前身）の総経理劉肇億，協理張徳禄らが募集を請け負い，山東，河北，河南一帯から労働者を集めた。香炉礁一帯の海岸を埋め立てて簡易な住居を建設した。ついで，日本の租借以後，大連の沙河口の満鉄工場，造船所，西崗子の周家炉の順興鉄工の三大工場の発展は大量の工場労働者を必要とし，ロシア統治期と同様，山東，河北，河南一帯から労働者が集められ，香炉礁一帯に彼らは集住した（韩悦行，2020，276-277）（友舎，2020）。

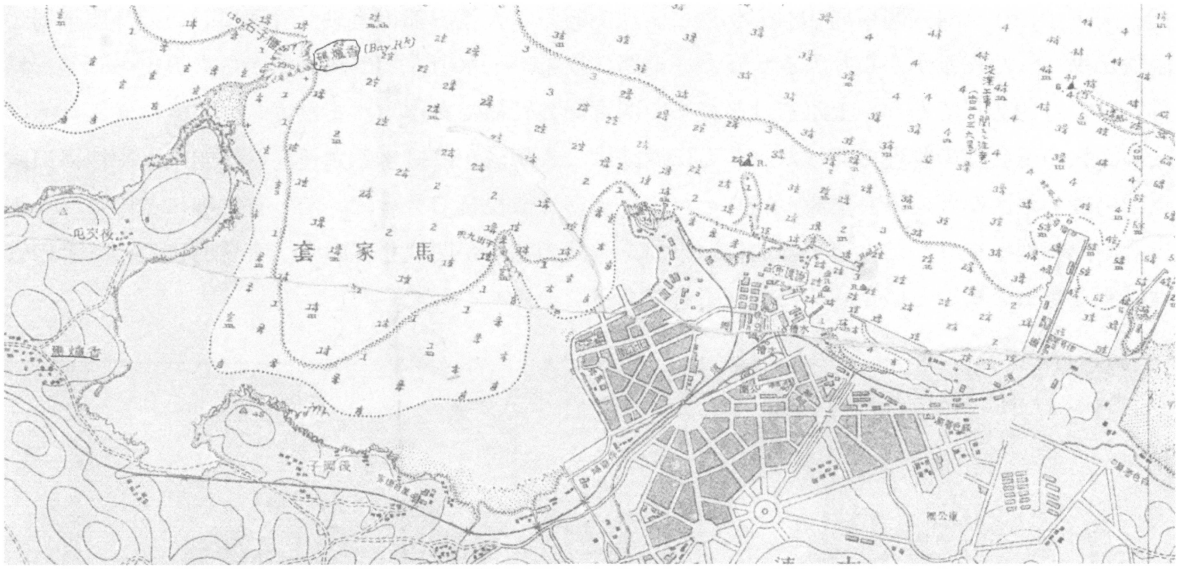

図4　大連湾　（1905年海軍水路部測量1907年発行　海上保安庁海洋情報部所蔵）

図４は日露戦争後，ロシアから日本の統治下になった大連市街地，大連港を含む大連湾の海図である。図の西側に，大連湾に突き出した半島がありその突端部に香炉礁という岩礁がある（図の囲み）。東側の大連港，市街地の間に馬家套という入江が形成されている。入り江の海岸部は水深が浅く，大型汽船の停泊には向かず，干潮時には陸地化する。半島の基部には香炉礁という集落が形成されている（図の下線部）。南満州鉄道の沿線にあるが道路は干潮時にのみ大連市街地とつながる部分もあり，大連の郊外という様子はみられない。この後，入り江の遠浅の部分が埋め立てられ労働者，移住者の住居地とされていく。

1920年代になると，大連では油坊業が大いに発展した。油坊業でも多くの労働者が必要とされ，彼らの多くが香炉礁一帯に住んだ。工場労働者だけでなく馬車曳，荷車曳など，郊外にある香炉礁には運送，交通関係の従事者も集まった。水道などは無く，飲料水は汲んできたものが二銭，沸かした湯は一壺一銭必要であった。年々不足する住居のため，労働者は自分でも住居の建築を行ったが，屋根葺き用油紙で小屋掛けした粗末な家屋が多く，風雨に堪えない衛生環境の劣悪なスラム地区であった。また増加する居住人口の生活，娯楽需要を満たすため，労働者を集める請負業者たちにより雑貨店，食堂，賭博場，アヘン窟，妓院などもみられるようになった。

そもそも大連の中国人労働者の居住地区には，二つのタイプがあった。一つは，日本人居住区に居住する苦力や車夫を1909～10年のペスト流行を理由に隔離した地区で，苦力を収容した寺児溝，馬車夫を収容した白雲山麓である。寺児溝は大連の都市計画区域内の東端に接し壁で囲まれた「収容所」であった。もう一つは，隔離とは反対に都市計画区域外の法の規制がかからないことから生じる放任によって出現した香炉礁，石道街の自然発生的居住地区である。沙河口に居住しきれない中国人の新たな居住地区となっていった（水内，1985，452）。

香炉礁の集落形成の基底には，大連市の都市計画区域外で法の規制がかからない放任地区であったことがある。三不管とも呼ばれたのは警察，日本植民者，当局政府の管理がなされなかったからという意見（友舎，2020）があるが，正確には日本統治側の管理者間の隙間であったのではないかとみられる。この場合の管理者としてあげられるのが大連市の他に，関東局（関東都督府1906～

19，関東庁1919～34，関東局1934～45）と満鉄である。大連の都市建設，管理においては関東局と満鉄が果たした役割がかなり大きかった。道路，橋梁，下水道などが関東局から大連市の管轄に移行したのは1939年であり，上水道は最後まで関東局の管轄であった。またガス，電気は満鉄，その後は満鉄の子会社の管理であった。さらに満鉄は，香炉礁が隣接する大連港の埠頭地区や沙河口鉄道工場社宅地区などの施設建設，経営を行い，当初は徴税まで行っていた。香炉礁にどのような都市計画，管理を行うかは大連市の他に関東局，満鉄の意向が関連しており，実質的にこの三者の管理の所在があいまいという意味での三不管であった。

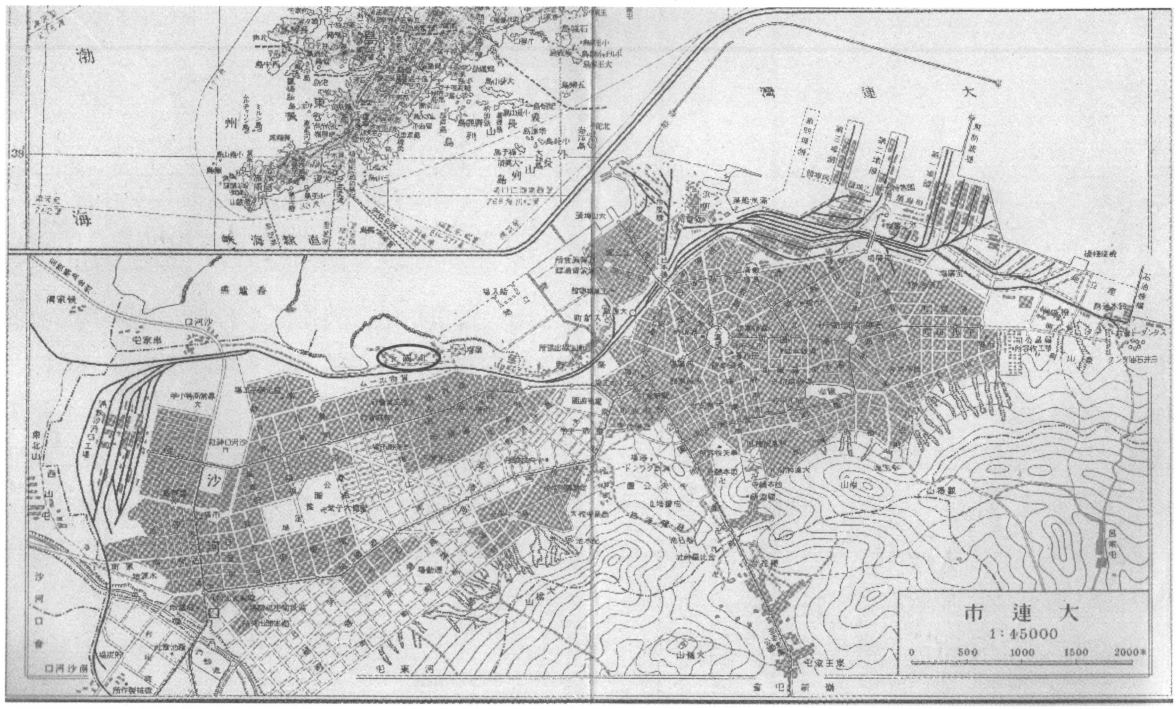

図5　1920年代の大連（『日本地理大系―満洲及南洋編』改造社（1930）所収）

図５は1920年代の大連である。大連本港は防波堤に囲まれた埠頭地区が鉄道の引き込み線とともに第三埠頭まで完成しており第四埠頭が計画されている。本港の西側は，かつてロシアが建設した旧港が大山埠頭として小型船やジャンクの港として利用され，その西側は埋立が行われ一部がその計画中となっている。埋立地に面する満鉄の線路の北側の北崗子（図中の囲み）は黒嘴子といわれ，屠畜場やゴミ捨て場があり，さらに大連市内の人糞を関東州の農村に肥料として転運する黒嘴子埠頭があった。

この時期の香炉礁はまだ大連市には属さず関東州の地方行政区画である沙河口會の香炉屯に属している。香炉礁には市街地から旅順や金州に向かう道路が敷設されており，香炉礁に接する南満州鉄道には1909年に沙河口駅が開業しており，大連の郊外としての性格が強くなった。図５には集落名としては沙河口という表示がされているが，図４でみたように地域名だけでなく集落名も香炉礁が本来である。北崗子から香炉礁にかけての地域は，工場の下層労働者，運送人夫，ごみや人糞の収集人夫，屠畜人達が集住しており，発展する植民地都市大連の陰の役割，しかし大連の発展には不可欠な役割を担わされている中国人居住地区であった。

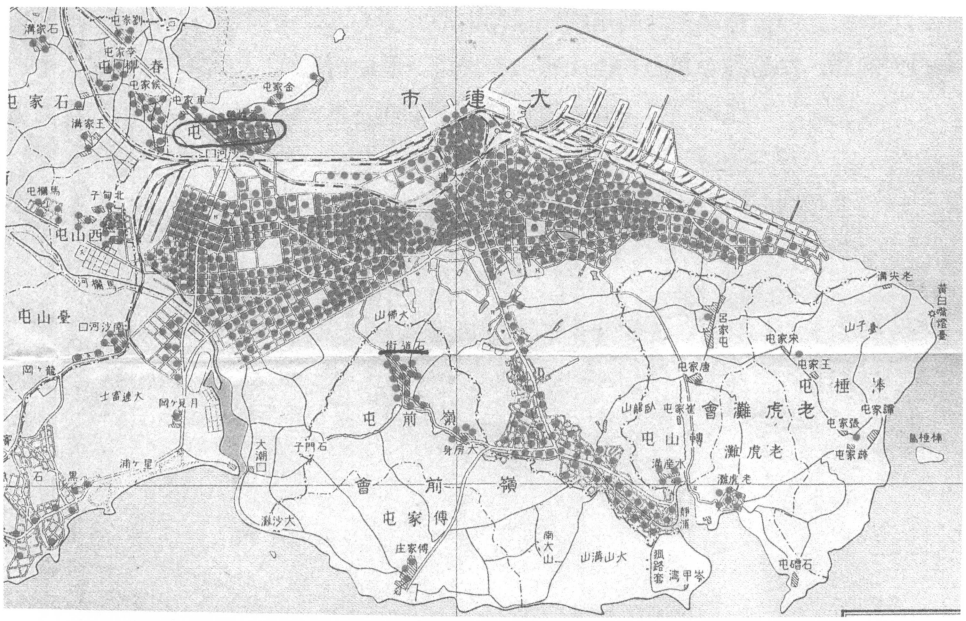

図6　1935年大連都市計画区域内人口分布図
（『大連都市計画概要』関東州庁土木課　1937　第1輯付図第8号に加筆）

図６は，1935年調査による大連市および郊外の一点が500人を示す人口分布図である。図中の囲みの香炉屯地区には郊外でも有数の人口集中集落である香炉礁があることが示されている。同じ自然発生的集落である石道街（図中下線部）に比較しても，人口の集中は大きい。

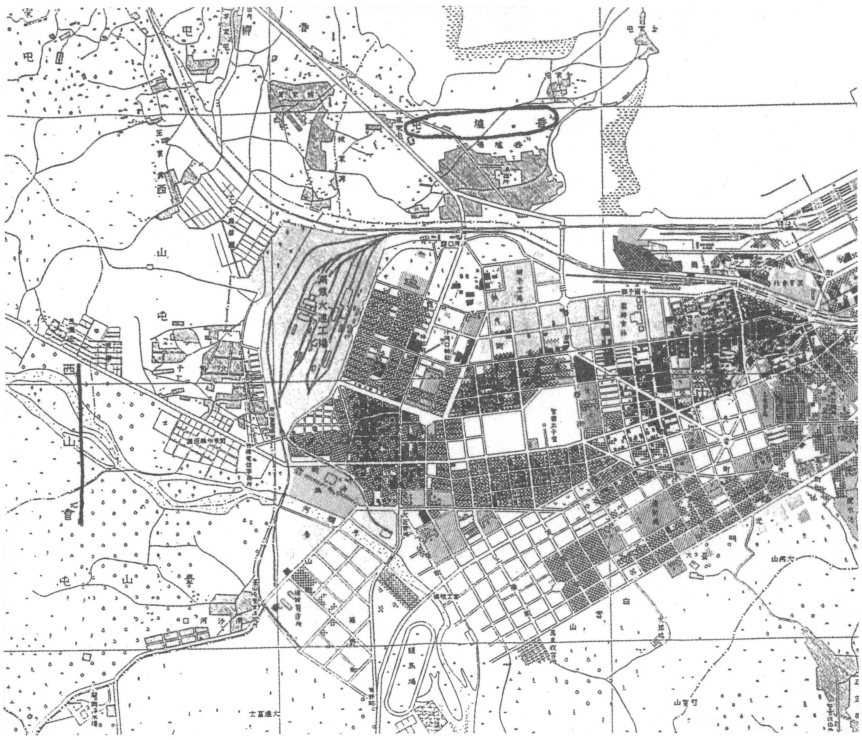

図7　1935年　大連市街地図
（図6『大連都市計画概要』第１輯の付図第４号を再編集した越沢明『大連の都市計画史：1898～1945年』日中経済協会会報no.134～136号抜刷合本（1984）所収の図9に加筆）

図７は，1935年調査の市街地土地利用図の西側の部分である。大連の西の市外は沙河口會から西山會（図中の傍線部）に名称が変わり西山會の香炉屯（図中の囲み）に香炉礁は属している。香炉礁の東側の北崗子の海岸は埋め立てられ，満鉄の鉄道車両基地になっている。香炉礁の海岸はまだ埋立は行われていないが，香炉礁は大連市街地から関東州北部，さらに満洲に通ずる主要街道に面し大連市街地への入り口として集住が進んでいることがわかる。

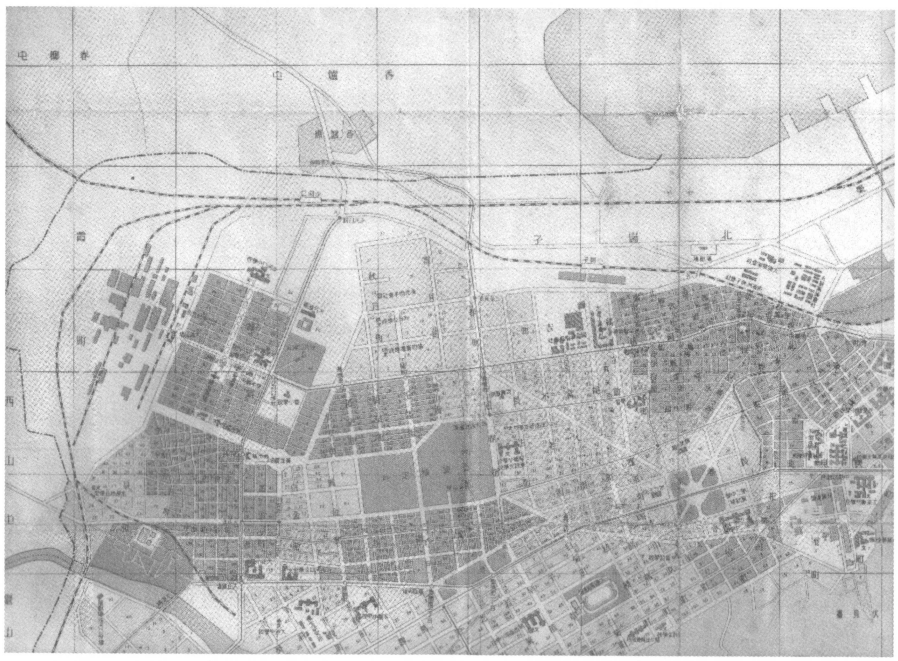

図8　1938年発行　大連市図の西部（『最新詳密　大連市全図』）

図８は1938年発行の図である。北崗子の北側は埋め立てられ満鉄の線路が敷設されている。香炉礁には大連都市交通社の電気軌道が乗り入れており，西香炉礁駅が開業している。この路線は香炉礁に南隣している沙河口駅からの延長ではなく，東部市街地との連絡を目的とした延長となっており，ここからも大連の北西部入り口の郊外として発展し始めている状況が窺われる。ただ図８は大連市編入前を表示しているということもあり香炉礁地区については詳細には描かれていない。

大連市内における中国人の増加，流入は満洲国成立後，加速化し，市外で市内に隣接する自然発生的集落である寺児溝，石道街，香炉礁への流入も増大した。市域の拡大が急務となった大連市は1937年これらの郊外を市域に編入した。香炉礁に本格的な管理がなされるようになったのは，ここからである。香炉礁以北の海岸埋立と大連西港の建設が計画された。1939年，香炉礁一帯の海岸部に大連西港の建設が開始された。それと同時に法的規制を受けてこなかった香炉礁集落のクリアランスが行われた。

図９　1943年の大連港西港
（1941年海軍水路部測量　1943年発行　海上保安庁海洋情報部所蔵）

図９は1943年発行の大連西港の海図である。北崗子から香炉礁にかけての海岸は埋め立てられ，大連本港からの鉄道線路が敷かれ埠頭が建設されている。1941年８月に西港第二埠頭（香炉礁碼頭）が完成し業務を開始した。主要な入泊地については水深７～８ｍに浚渫されている。香炉礁を含む陸上の集落については簡略化されているが，大連市の主導の元で開発が開始された。ただ太平洋戦争の勃発とともに開発，築港のスピードは減速し本格的な都市，港湾整備には至らなかった。

香炉礁は日本，中国，第三国などの間に形成されたものではなかったが，日本側統治機構の狭間に形成された自然発生的集落で三不管と呼ばれた。ただ抗日活動の拠点とみなされていたため，植民地行政当局は巡捕や中国人スパイを使って抗日分子の摘発を行っていた（韓悦行，2020，277）。この点については別に論じたい。香炉礁は大連西港の建設とともに抗日拠点としてのクリアランスと再開発の対象となったとみられる。

本稿で取り上げた華北，満洲の近代都市の三不管は，日本人，特に観光，周遊で訪れるようになっていた日本人の目に止まることはほとんどなかった。その都市に在住の日本人で生活圏の中に三不管が存在していた者の中で租界や植民都市の繁栄とは対極にある場所に関心を持った者が残した資料を今後とも発掘し，無秩序の中の秩序に注目しながら中国側の資料と対峙させることが今後とも必要である。

参考文献

東京建物天津支店，1939a，「三不管市街計画目論見書」謄写22p（個人所有）
東京建物天津支店，1939b，「水害日記」謄写22p（個人所有）
東京建物，1998，『信頼を未来へ：東京建物百年史』東京建物
山田清三郎，1955，『明けない夜はない』理論社
韓玲玲，2015，「北村謙次郎の小説シリーズ『或る環境』とその社会的背景－一九一〇～一九二〇年代の大連」『日本研究』No.51

北村謙次郎，1940,「つひの栖」『文藝』8-8
関東州土木課，1937,「大連都市計画概要」第１輯
越沢明，1984,『大連の都市計画史：1898～1945』越沢明
水内俊雄，1985,「植民地都市大連の都市形成－1899～1945－」『人文地理』37-5
韓悦行，2020,『文明寻脉：大连掌故』大连出版社
友舎，2020,「香炉礁，旧貧民区」http://blog.sina.cn/dpool/blog/u/1513471352 最終閲覧　2022.9.24
森勝彦，2019,『不管地の地政学－アジア的アナーキー空間序論－』中国書店